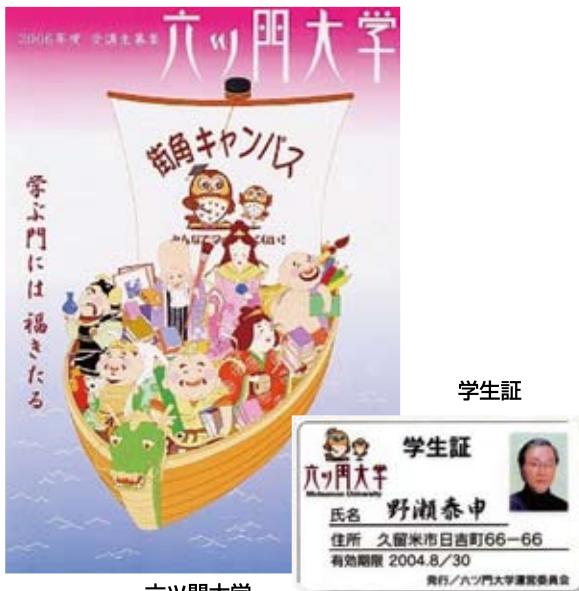


人が「集まる」コミュニティ創り

！ここがポイント

誰もが安心して出かけることができる商店街。
「街なか」ならではのゆっくりとした時の流れを楽しめる、人にやさしい街づくりをめざす。



市民の「学ぶ力」と「考える力」そして「教える力」を育む

【取り組みの背景】

久留米市の中心商店街は東西800mのゾーンに2つの大型商業核と10の商店街が集積している。近年は、郊外の大型商業施設や福岡市天神地区へ顧客が流出し、賑わいが失われつつある。

この2核1モールの中心商店街の西側に位置する「六ツ門商店街」では、衰退が顕著となり始めた2000年から「人に優しい街づくり」をテーマにした様々な取り組みを始めている。

事業推進のポイントは次の3点である。

- ・ 街の活性化と市民力の向上
- ・ 高齢者に優しい商店街
- ・ NPO、地域医療との協働

【取り組みの概要・経過】

①六ツ門大学

《人が集まるコミュニティ創り》

六ツ門商店街では、商業者を始め、市民やNPOなどが連携したコミュニティ創りを重点的に取り組んでいる。

中心部の賑わい創出拠点として久留米六角堂広場が整備された2004年、商店街の空きビルを活用した生涯学習拠点「六ツ門大学」が誕生。安全で安心な街に「人が集まり」、「学び」、「癒される」商店街らしいコミュニティの充実を目的に商店街有志が中心となり「六ツ門大学設立準備委員会」を組織。街づくり会社ハイマート久留米がバックアップして開校した。

大学での講義の内容は、六ツ門商店街に因み6つのカリキュラムで構成、年間500回を超える講義が行なわれ、約6千人が受講している。大学は、実行委員会方式で運営され、メンバーは商店主の他、大学教授、地域ボランティア、商工会議所や久留米市の職員などで構成されている。

学生には学生証が発行され、入学の特典として学生証や受講券の提示により、商店街の協力店での割引サービスや百貨店駐車場の無料サービスが受けられる。

②タウンモビリティ事業

《高齢者に優しい街づくり》

超高齢社会が目前に迫り、2025年には3人に1人が高齢者となる。年をとっても障害があつても、毎日を

活き活きと暮らすために買物したり、食事をしたり、街なかで誰もが楽しい毎日が送れるようにする。それがタウンモビリティの考え方である。

六ツ門商店街でのタウンモビリティ事業への取組みは、NPO「こうれい研」の提案をきっかけに2000年から開始された。

タウンモビリティは毎週木・土・日に実施。ドアトウドアで高齢者を送迎し、買物サポートやコミュニケーション活動を行っている。利用者は年間千人を超える。

また、身体状況に合わせて電動スクーター、車椅子、シルバーカー等を無料で貸し出している。各医療・福祉団体等の協力で健康相談、福祉相談、介護相談などを定期的に実施している。

【取り組みの効果】

六角堂広場の集客力を軸に六ツ門大学やタウンモビリティなどの連携事業により、商店街に新たな人の流れが生まれ、商業者の自主的な取り組みの中、市民・大学・NPOなどの様々なネットワークによるコミュニティ形成が図られている。

2000年のタウンモビリティ事業開始以来、「パートナーシップ活動」という様々な連携が地域全体に広がりつつある。これらの街づくりモデルのストックを活かし2009年“まちなか連携施設”「街の駅一番街プラザ」がオープンした。前出の街づくり会社ハイマート久留米が、1,400病床の総合病院のグループである聖マリア学院大学と協働し、同プラザ内に「まちなか保健室 ほっとステーションマリア」を併設。休憩スペースや多目的トイレ、授乳室、キッズコーナーなどの利便機能や聖マリア学院大学による健康相談のほか、定期的に健康や子育てをテーマにしたセミナーを開催し、生活支援・多世代交流の拠点として市民から大きな期待が寄せられている。

【今後の課題など】

「六ツ門大学」「タウンモビリティ事業」の共通の課題は

財政的自立である。両事業とも年々、受講者数・利用者数は増加傾向にあるが、一方で、ランニングコストの一部は補助金によってまかなわれている。

特に、六ツ門大学については、財政基盤の確立とともに「商店街の大学」という強みを活かし、より多くの学生をどのように増やしていくかがポイントであり、このことは商店街の顧客の増加にもつながる。更なる講座内容の充実や、自分の経験・知識を教えることに生きがいを感じる市民講師の育成も図っていかなければならぬ。

そのためには、個々の商店が六ツ門大学を顧客にPRし、応援していく姿勢をさらに強めていくことも重要である。「経営の視点」と「街づくりの視点」を合わせ持ち、地域生活者の「商店街満足度」をより高めていかなければならない。

【六ツ門商店街】

所在地：福岡県久留米市

会員数：32組合員

商店街の種類：コミュニティタイプ

関連URL：

<http://www.kurume-mutsumon.info/uni/index.html>



タウンモビリティ
送迎ボランティアが
ドアトウドアで

タウンモビリティ
利用者とボランティア
の交流



大町町から一店逸品で元気発信!

！ここがポイント

意欲あるメンバー同士が消費者の視点で互いに意見を交わしながら逸品を練り上げていきます。



フェア直前の内覧会の様子

【取り組みの背景】

佐賀県杵島郡大町町は佐賀県のほぼ中央に位置し、JR佐世保線を境に北部が商業・住宅地、南部が農業地域を形成しており人口7,500人、高齢化率30%の町である。

大町町は炭鉱の町として栄え、当時は日本一のマンモス小学校と呼ばれるほど人口が多い町であった。しかし、昭和44年に炭鉱は閉山。職を失った炭鉱労働者やその家族などが町外へ流出し、以降人口は減少の一途を辿っている。

このような中、消費者ニーズへの対応の遅れや競争環境の激化、さらには後継者不在による廃業などにより、商店街の空き店舗は年々増加する一方である。このような厳しい現状を何とか打破し

ようと様々な活性化事業に取り組んできた。

具体的には、高齢者にやさしい商店街を目指し、電動スクーターの貸出し実験事業や、ちょっと一息入れる休憩場所として空き店舗を茶屋に改装し、様々な体験教室を実施するなど来街者の利便性を高める事業、さらには、商店街の店頭に広告版であるイーゼルを設置したり、一般の方が趣味で作られた手作り品などを店頭で展示販売する『手作り品出前店舗事業』にも取り組んでおり、商店街の魅力向上を図っている。

しかし一方で、各個店の商品やサービスの向上といったお店本来の魅力アップへの取り組みは個店まかせになっており、消費者の視点に立った品揃えやサービスを提供していくことが必須の課題である。

【取り組みの概要・経過】

①一店逸品運動

逸品とは、お客様に喜んでいただけてなおかつお店らしさを表現できる商品やサービスのこと、それらの商品やサービスを研究会の中で継続的に開発・発掘し、逸品フェアというお披露目を定期的に開催していく一連の活動を一店逸品運動と呼んでいる。

この取り組みは、平成18年度に商工会が主体となり、商店街の商店主などへ参加を呼びかけ、意欲ある16名のメンバーでスタートした。以来

今年で3年目を迎え、地域の消費者の方々にも徐々に浸透はじめてきた。

今年行われた第3回一店逸品フェアでは、初めての試みとして商店街の逸品参加店を巡る『ワンコインコース、まんぶくコース』の2コースを企画。町内外より約30名の参加を得た。具体的な内容は、『魚のさばき方教室』、『ソムリエによるワインテイスティング』、『一級写真技能士による美しく写る魔法のレッスン』、さらには、空き店舗を利用して『ミニ畳作り体験』や『手作りみそ作り体験』をしながら、数時間かけて商店街を練り歩いていただいた。途中、昼食として逸品メニューに舌鼓を打ちながら、家庭で簡単に出来る料理のコツなどを教授した。

さらに、逸品を広くPRするためホームページ『大町版逸品がばいよか』を開設し、全国へ向けて大町の逸品を発信している。

(<http://www.gabaiyoka.com/>)

【取り組みの効果】

地元にいながら商店街を利用したことがない消費者が意外と多く、ツアーの参加者からは『商店街を普段歩くということがなかったのでいろんな発見があり良かった』との声や、メンバーが積極的に商品やサービスをオススメする姿を見て、『大町にもこんないい物があるんだと思った』など嬉しい声が聞かれた。

一方、参加したメンバーからも『お客様の反応はかなり良かった』『お客様とコミュニケーションが深まり商売に発展した』『メンバー間で仲間意識が芽生えた』『また商売を頑張ろうという気になった』など前向きな意見が多く出された。

また、逸品フェア前後における集客数と売上面を比較すると、『増加した』と答えた店舗が半数を超えた。

【今後の課題など】

食品の产地や消費期限偽装事件などの影響により今まで以上に消費者の目が厳しい中、地に足をつけ安心安全の商品やサービスを提供する個店を嗜好する消費者が増えつつある。

今後、一店逸品運動を継続する上では、更なる加盟店の増加による商店街全体の一体感の醸成や各個店の更なる商品力・サービス力の向上、さらには、PR活動を強化していくことが課題であると思われる。

こうした中、逸品メンバーのうち食品関連のメンバー同士で、それぞれの逸品を組み合わせて新しい大町ブランドとして商品化していくこうという構想もでており、今後の発展に大いに期待したい。

【大町商店街】

杵島郡大町町大字福母419-3

一店逸品研究会加盟店 16店舗

<http://www.gabaiyoka.com/>



逸品巡りツアーの様子



空き店舗での味噌作り体験の様子

銀聯カード導入など 国際観光文化都市の再生

！ここがポイント

長崎とゆかりの深い中国からの観光客を呼び込むため、「銀聯（ぎんれん）カード」対応の端末機を商店街全体で導入し、国際観光文化都市の再生を目指す。



(出典元：レスポンス)

長崎浜んまち商店街（ランタンフェスティバル）
長崎在住の華僑が始めた、中国色豊かな灯の祭典。
冬を彩る一大風物詩。



長崎さるく

ガイドの説明を受けながら、名所旧跡を歩く。
専門家による講座も開催。

【取り組みの背景】

長崎市は、1571年のポルトガル船入港以来、海外諸国との貿易・交流を通じて、国際観光文化都市として繁栄してきた。その中心市街地の中核となる長崎浜んまち商店街振興組合連合会は、5つの商店街振興組合で構成されており、様々なイベント等に一体となって取り組んでいる。

長崎では、国際色豊かな名所旧跡をガイドの説明などを受けて歩く「長崎さるく」が年中行われており、さらに、ランタンフェスティバル、長崎くんち、ペーロンなどのイベントも頻繁に開かれている。また、いち早く中国からの観光客の誘致にも取り組み、上海からの国際クルーズ船の寄港地にもなっている。しかしながら、近年、人口減少や近隣大型店の進出などの影響で、商店街は商店数、売上高ともに減少傾向にあり、観光客誘致を踏まえた消費拡大への取り組みが急務となっている。

【取り組みの概要・経過】

同連合会は、「浜んまち・ストリート・カルチャー」として、「浜んまち映画祭」の開催や、音楽、演芸などのイベントを実施するとともに、月刊フリーペーパー「ハマスカ」を発行し、観光客を含めた集客交流事業を主体的に取り組んできている。

こうした中、商店街を訪れる幅広い年齢層の多様な決済ニーズに対応するため、さらに、最近増加している中国人観光客の決済にも対応するため、後払い電子マネー「iD（アイディ）」、プリペイド型電子マネー「Edy（エディ）」、中国人観光客向け決済サービス「銀聯（ぎんれん）」に対応する共用端末の導入による決済システム「長崎ぶらっと」を2008年2月に開始した。

このサービスを開始したのは約300店舗にのぼり、商店街としては全国でも最大規模となる。

【取り組みの効果】

中国では人民元や外貨の持ち出し制限があり、海外旅行で高額な買い物ができない環境にあるが、海外旅行先が銀聯カードに対応していれば貴重な持ち出し現金を使わずに買い物が可能となるため、中国人観光客にとっては大きなメリットとなり、中国人観光客の増加と相まって商店街の売上拡大が期待される。

また、iDやEdyはカードだけでなく、最近利用者が急増している「おサイフケータイ」にも対応しており、すでに長崎で開始しているバスや路面電車の運賃支払への利用拡大と合わせて、商店街のにぎわい創出に大きく貢献するものと見込まれる。

【今後の課題など】

同連合会では、周辺駐車場の満空情報などを携帯電話やパソコンに発信するシステム「とむ～でドットコム」、また、ファッション、音楽、食文化などの講座を各店舗で開催する「長崎県民大学・浜んまち界隈キャンパス」といった取り組みを行っている。さらには、外部からマネージャーを招へいして、商店街が抱える課題の整理や今後の取り組みの方向などを検討し、浜んまちの特長を生かしたまちづくりを進めている。



(出典元：レスポンス)

中国人観光客向け「銀聯（ぎんれん）カード」などに対応した端末機

【長崎浜んまち商店街振興組合連合会】

所在地：長崎市浜町、万屋町、古川町、

鍛冶屋町

会員数：5商店街

長崎浜市商店街振興組合

長崎浜市観光通商店街振興組合

長崎浜市電車通商店街振興組合

長崎浜市万屋通り商店街振興組合

長崎鍛冶市商店街振興組合

店舗数：約300店舗

商店街の類型：広域型商店街

URL：

<http://www.hamanmachi.com/index.php>



長崎くんち（龍踊り）

1634年に始まった奉納踊りを披露する長崎の代表的なお祭りで、国内はもとより海外の観光客にも堪能いただいている。



長崎ペーロン選手権大会（長崎港）

1665年に在留中国人が海神を鎮めるために競漕したことが始まりで、近年は中国との親善交流も行われている。

市街地再開発事業で「国境の島」を活性化

！ここがポイント

商業施設と公共施設の複合により暮らしやすさの向上と韓国との国際交流拡大を目指して中心市街地に大型再開発ビルを建設。



対馬市交流センターの外観

【事業実施の背景】

対馬市は玄海灘に浮かぶ南北82km東西18kmの細長い島で、面積708k m²と佐渡島、奄美大島に次ぐ日本で3番目に大きい島である。南は対馬海峡を隔てて福岡市まで138kmに対し、北は朝鮮海峡を隔てて韓国釜山市まで49.5kmの近い距離にある。

このような地理的条件もあり古来より朝鮮半島との交流も非常に盛んで、鎖国時代にも交易の窓口は開かれていた。対馬の中心市街地厳原町は、主にこの交易の利益により古くから島の政治経済の中心地として繁栄してきた。

しかし、古い城下町の市街地は、老朽化した木造家屋が密集し道路も狭いえ駐車場不足のため利便性も悪く、加えて平成6年以降郊外の幹線道路沿いに大型店が相次いで出店したことにより、急速に中心市街地商店街の求心力が低下し空洞化が進んだ。

空洞化し魅力を失った中心市街地を活性化させるために、平成8年度の「特定商業集積基本構想」を経て平成12年度の「中心市街地活性化基本計画」を策定、平成14年3月には「TMO構想」の認定を受け TMO 機関株式会社が設立されたことによりショッピングセンターと市民交流の場である公共施設の一体的な整備を目指した。

【事業の概要】

①城下町にふさわしい重厚な外観

平成18年度第一種市街地再開発事業の手法により、地下1階地上4階の対馬市交流センターが建設された。施設の外観には「瓦葺の大屋根」や「石垣」を取り入れ古い城下町の景観を崩さない配慮がなされている。

②暮らしと交流の拠点

施設の機能については、地下1階に150台収容の「市営駐車場」を設置し、商業床を所有する株式会社が管理運営を行うことにより、駐車料金90分無料を実現して好評を得ている。

1階2階には「ショッピングセンターティアラ」を設置し、事業の推進にあたっては数回実施したアンケート調査をもとに、必要とされた大型食品スーパーを核とした16テナントを導入した。2階には750席の「イベントホール」を設置した。3階の「公民館」には使い勝手のよい様々な広さの会議室、展示室、実習室を設置し、市民の交流

の場となっている。4階は「市立図書館」で6万冊の蔵書がある。

③「韓国人観光客支援センター」の設置

1階に「韓国人観光客支援センター」を設置し、韓国語の通訳を常駐させて中心市街地全域での韓国人観光客の買物案内やトラブルに対応している。このほか施設内では関係者向けの韓国語講座を開催し、韓国人観光客向けのサービス向上に努めている。

【事業の効果】

①新たに140人程度の雇用創出。
 ②店舗で年間115万人、施設全体で年間約131万人（1日あたり約3500人）の来館利用者。駐車場は年間約36万台（1日あたり約1000台）の利用実績。

韓国から対馬に来る観光客（年間6万5千人）のほとんどが施設に来館して土産品購入や飲食、休憩のため施設を利用。（韓国人観光客支援センターの活用）

③1階の「ポケットパーク」での地元生産者による「城下町朝市」、周辺商店街による「スタンブ会福引抽選会」その他販売催事、ミニライブ、写真展、健康維持のための「街の保健室」などのイベントの開催。（中心市街地の賑わい創出）

【事業の課題】

現状は商業施設の売上も好調で、図書館やイベントホールの利用者も予想を上回る実績で推移しているが、離島という閉鎖的な商圈である上、急激に人口が減少しており集客数や売上の減少が予想される。このようなことから商圈内の消費者に留まらず毎年大幅に増加している韓国人観光客（平成18年4万人→平成19年6.5万人）をより多く取り込むための商品構成や接客サービス、イベントの実施などを行う必要がある。

【対馬市交流センター】

所在地：対馬市厳原町今屋敷661-3

施設概要：鉄骨造一部鉄筋コンクリート造

延べ床面積19888m²

B1 駐車場150台（90分無料）

1F～2F ショッピングセンター「アラ」6店舗
 （物販11飲食3サービス2）

2F～4F イベントホール750席

3F 公民館（会議室・和室・実習室）

4F 市立図書館



瓦葺大屋根下の「城下町朝市」会場



賑わい創出の場「ポケットパーク」



ショッピングセンター「アラ」内

少子高齢化に対応した 医商連携型まちづくりの実現

！ここがポイント

「人にやさしく、地域に愛されるショッピングモール」を基本コンセプトとし、誰もが何不自由なく買い物ができる次世代型まちづくりを推進。



七夕笹飾りの様子

【取り組みの背景】

昭和20年に水前寺より健軍まで市電が延伸され、古くから民家が多数集積して、我が健軍商店街は熊本市東部地区発展の起点となってきた。しかし、高度経済成長、バブル崩壊などにより社会が複雑化し、近郊には大型ショッピングセンターの建設等により、近隣住民のライフスタイルも大きく変化してきており、地域での商店街の役割そのものが変化してきている。とりわけ隣接校区の高齢化が熊本市の中でもトップクラス（市平均より6%程度高い）で進行しており、少子高齢化の時代に向けて、地域の暮らしを支える商店街として、そのあり方を模索していくことが重要となってくる。このような流れの中で、地域に密着し力がありモデル性のある商店街づくりの活動を続けている。

【取り組みの概要・経過】

①いきいきショッピング推進事業

高齢者、障害者や買い物をされた方が、重かつたり、かさばったりする荷物をスタジオで預かり、自宅まで直接宅配するシステム（タクシー宅配事業）。午前中買い物された商品をお昼12:00より、午後買い物された商品は16:00よりタクシーで自宅まで配達するシステムで1個300円で配達、うち商店街より200円の補助券を発行し利用して頂いた。現在は肥後タクシーに事業を譲渡し宅配料300円のうち100円の補助を行っている。また、電動スクーターの貸し出し、相談コーナーや休憩スペースを設置して、高齢者等が安心して買い物ができる空間を構築した。

②商店街振興ビジョンの策定

健軍商店街では隣接する4つの商店街と合同で「健軍まちづくり推進協議会」を設立し、夢のある魅力的なコミュニティを創ることを目指す「商店街振興ビジョン」を商店街が自らの手で策定した。ビジョンでは「人にやさしく、地域に愛されるショッピングモール」を基本コンセプトとし、7つの基本方針を掲げ17事業を策定し隨時事業に取り組んでいる。中でも最初に取り組んだ事業として地域マップを作成、地域の医療機関28医院を記載し連携を図り好評を得た。

③健軍・まちの駅の開設

高齢者の方々の要望を受け、空き店舗を活用し県内の道の駅・物産館・小規模作業所など15事業者に順

次出店して頂き、特産品や加工品の販売を行った。現在は商店街事務所1Fにて商工会連合会青年部の協力を得て前青年部長が「まちの駅」の事業運営を行っており、大変喜ばれ集客に繋がっている。

④やりがいビジネス創造事業

熊本市商店街モデルプラン策定に協力し、健軍商店街において「やりがいビジネス創造事業」としてピアクレスキッチンを運営している。ピアクレスキッチンは空き店舗を活用、1日1,000円の使用料で地域の方々により趣味を生かした総菜やパンなどの自慢とする料理を販売して頂く事業で、お買い物されるお客様に大変好評を得ている。

⑤若者サポートステーションの開設

「NPO 法人お～さあ」と連携をして、地域の方々とともに設置した「健軍地域福祉塾」が若者達の居場所がないという声に応えるため、平成18年7月に「夢・サポート健軍」をオープン。平成19年5月には厚生労働省からニート就業支援の委託事業として「くまもと若者サポートステーション」を開設。必要に応じ、臨床心理士やキャリアカウンセラーによる専門相談を実施している。

【取り組みの成果】

地域の方々の声を反映させ、生活に密着した事業の実施により成果が上がっていることを実感している。特にタクシー宅配事業においては、当初3ヶ月間の利



タクシー宅配

用が429件であったのが平成19年度の1年間においては14,877件の利用があり、現在まで毎年伸びている。また、「健軍・農村地域間交流フェスティバル」「まちの駅」「ピアクレスキッチン」などの事業は、熊

本国府高校など様々な団体・行政・地域の方々との連携により成り立っており、健軍商店街に対するまちづくりの気運がさらに高まっている。熊本市・熊本商工会議所が毎年行っている商店街通行量調査においても、20年度は若干ではあるが日曜・平日とも増加している。

【今後の課題など】

高齢者等にとって、真に安心できる街として認知されるには、更なるハード面・ソフト面の整備・充実が必要である。子供からお年寄りまでが健康でハツラツと暮らせるように、「医」と「商」が連携した機能を商店街に持たせる必要がある。先ずは、医食同源を地でいく取り組みとして、安心安全な食材を提供し心のふれあいを大切にした医商連携型まちづくりを更に推進したい。

【健軍商店街振興組合】

所在地：熊本市若葉1丁目35-18

組合員数：56店舗

URL : //www1.ocn.ne.jp/~kengun



【ピアクレスキッチンの様子】



【まちの駅の様子】

点(店)から線(散策)そして面へ、 参加交流型プログラムで活性化新展開へ



！ここがポイント

再生途上にある別府温泉の中心街で、地域資源を磨いて参加交流型の集客プログラムづくりを行っている。このいわゆる「オンパク・モデル」は全国の中心街活性化の手法としても注目され、現在10地域にわたり移植されている。



中心街の集客プログラム「夜の竹瓦路地裏散策」

【事業の背景】

別府市は温泉観光地としてのピークを70年代中半に迎え、その後長期にわたり宿泊客は微減傾向を示した。この当時、その中心は別府に八つある温泉エリア（別府八湯と呼ばれる）のなかの別府温泉であった。

別府駅を中心とし、商店街や旅館街がひしめく中心街エリアが最高の賑わいを見せた時代である。

その後、90年のバブル崩壊、97年以降のデフレ経済などの影響を受けて、観光客と近隣の人々や市民で殷賑を極めたエリアも過疎化・高齢化問題、空き店舗問題、旅館ホテルの再生問題などを抱えることになった。

中央資本のチェーン店など中大型店も郊外に進出、車社会のなかで中心街の疲弊度は高まった。

この問題に解決策を見いだそうとする動きは、90年代中半から町づくり運動として起こってきた。94年に始まっ

たクリスマス HANABI ファンタジアは中心街活性化のイベントとして始まり、通り会、旅館ホテル業界が一体となって行われ、今では別府最大のイベントに成長した。

しかし、問題の抜本的な解決策としてはあまりに非力であったことから、その後、息の長い町づくり運動の人材が輩出していくことになる。

98年に別府温泉のシンボルである「竹瓦温泉」を中心とした町づくりを行うグループが結成された。「別府八湯竹瓦俱楽部」である。町を活性化するのは、その町を愛する人々が集い、憂い、活動が生まれ、人材が持続的に育っていくこと。

このような動きのなか中心街のテーマとして、1. 竹瓦温泉や波止場神社、竹瓦小路（木造アーケード）などの近代化遺産を拠点化する、2. 共同湯を維持して温泉文化を守る、3. 路地裏空間を有効利用する、など今までの集客事業とは全く異なると言ってよい民活事業が生まれることになった。

99年以降は「路地裏散策事業」「路地裏文化祭」「ゆかたDEピンポン」などが立ち上がる。

【取り組んだ事業】

中心街に今ある魅力を磨いて集客プログラムを作っていくという動き全体をプロデュースしていったのが、01年から始まった「ハットウ・オンパク（=別府八湯温泉泊覧会、NPO 法人ハットウ・オンパク主催・代表 鶴田浩一）」である。

郎)」である。

「オンパク」は春と秋に約1ヶ月に渡り開催され、地域資源を発見・発掘して、磨いて、参加体験型プログラムしていくという、地域活性化のための町づくりイベントである。

同法人の運営理事野上泰生や女性スタッフを中心とし、商店・飲食店や旅館、NPOなど様々な地域事業者の協力を得て、中心街で多くのプログラムが作られ、集客効果をあげ個店の顧客獲得にも成果をあげている。とくに町歩き系のプログラムは日常化され観光客を年間約七千人集客するようになった。

プログラムは主に4つのカテゴリーに分けられるが、その一部事例は下記のとおり。

1. 商店相互の連携モデル

「浴衣美人でフルコース」；呉服店と化粧品店
とカメラ店が連携

2. 中心街の旅館・ホテルや共同湯などの連携モデル

共同湯とホテル・コンサートなどの連携

3. ガイド付き散策と飲食店等との連携モデル

「B級グルメの町歩き」；飲食店と散策の連携

4. ウエルネスモデル

「身体の内と外からきれいになろう」；医院と
温泉施設との連携

【中心街のこれから】

このように商店、飲食店、旅館・ホテル、医院などやる気のある事業者が連携し、集客効果も見えるようになり、なによりも個店の顧客獲得に役に立つことになった。

オンパク顧客は5千名に達しており、これらの人々にいかに中心街の魅力を体験してもらうかが今後のリピーター獲得の重要な要素である。

08年7月に中心街活性化計画が認可され、1. 間口改良事業、2. 実験的事業として空き店舗で現代アートのプラットフォームの構築事業なども行われていることから、各事業が相乗効果をあげ、徐々に面的にも集客を期待できる水準までに達してきた。

さらに、地域資源の商品化や起業の人材育成事業も実施

しており（中小機構の補助事業）、来年度にかけて中心街で事業展開する新規事業者が輩出するものと期待されている。

【別府市中心部の商店街】

○8つの商店街

駅前商店街

西法寺商店街

やよい銀商店街

ソルバセオ銀座商店街

別府民衆駅南名店街

流川通り会

海門寺通り会

楠銀天街

○所在地

別府駅周辺

○中心商店街統計（H18、大規模店除く）

店舗数 211店

売り場面積 11,300m²

○NPO 法人ハットウ・オンパク

〒874-0920 別府市北浜2-10-19 4F



B級グルメ店が持ち寄る試食会



まちなみ温泉散策プログラム

～若手の情熱がつなぐD oまんなか コミュニティ～

！ここがポイント

「D oまんなかモール委員会」は「活性化イベント事業」を通して組織の強化、販売促進、そして様々な人々の集う「D oまんなかコミュニティ」の形成を目指しており、そこには若手の熱い想いが注ぎ込まれている。



早朝ミーティング：多い時には参加者が20名を超える
(中央が錦田委員長)

【～商店街をひとつのモールに～】

平成17年4月、橘通3丁目周辺の商業者が宮崎市の中心市街地（ど真ん中）を維持、再生、発展させる為に周辺の7商店街、5大型店を中心としたエリアを一つのショッピングモールと見立て「D oまんなかモール」と名づけた。D oまんなかモールでは各商店街、大型店の代表からなる「D oまんなかモール委員会」、さらには外部の学識経験者、行政関係者、市民団体関係者からの助言、協力を得るための「D oまんなかモール協議会」も発足した。月1回開催する委員会では各商店街・大型店の情報交換やイベントの予定、反省、今後の取り組みなどが協議される。また実際のイベント実施に係わる委員会内の販促部では、毎週月曜日の午前8時から早朝ミーティングを行い情報の共有

化を徹底している。

委員会発足に際して、先ず共通認識として中心市街地の置かれた厳しい現状を真摯に受け止め、「街の文化はどうあるべきか」、「お客様の求めている街・モノとは？」など様々な議論を徹底的に行った。その結果、街が統一してどの店舗でもホスピタリティを持って最高のサービスを来街者へ提供でき、イベントにおいても見るだけではなく、参加することで街を楽しんでもらう居心地の良いモールをつくることを目標とした。

【～イベントによる情報の共有化と組織の強化～】

平成17年度は構成商店街代表である橘通中央商店街振興組合が経済産業省の「戦略的中心市街地商業等活性化支援事業」を活用し、商店街、大型店の垣根を越え、NPOや市民団体等を加えた共同イベント（103イベント、28, 100人の集客）を実施した。初代販促部長であり、2代目委員長であった村岡浩司氏はこの「イベント」をただ実施するのではなく、「誰でも参加でき、誰でも楽しめるイベントシステムの構築」について徹底的に議論を行なうことで、中心市街地活性化へ対する意識の統一、中心市街地衰退への危機感の共有化、また「街に来られるお客様は、みんなのお客様である」ことを委員会内に根付かせた。その想いは2代目販促部長、現委員長の錦田雅哉氏に受け継がれることになる。

【～街に来られるお客様は、みんなのお客様である～】

来街者の利便性の向上を目指して、平成19年4月より宮崎商工会議所と連携して「30分無料共通駐車券」(Doまんなかパーキングシステム)を開始した。このシステムは、来街するお客様のために商業者は駐車券発券により駐車代金を負担、駐車場は商店街が負担しやすいうように、駐車代金の割引、といった利害調整から成り立ち、関係者全員で支えるものとなっており、6,000枚からスタートした発券枚数も20年10月は2万枚に達している。さらにはお客様へのホスピタリティの向上を目指して、商工会議所で実施している検定「販売士3級」の資格取得を目指す「Doまんなか大学」もスタートさせた。

【～Doまんなかコミュニティの形成～】

イベントは季節ごとにテーマを決め、各団体と連携を強化しながら回数、参加者とも着実に増加を続け、平成18年度は168回、集客72,150人、平成19年度が222回、92,600人と着実に「誰でも参加でき、誰でも楽しめるイベントシステムの構築」は進んでいる。平成20年度は錦田氏が委員長に就任、その中で現在の販促副部長である甲斐輝一氏は、今後の街の宝である「大学生、高校生」のイベント参加を積極的に支援している。これまでの成人式祝福イベントに加え、4月には宮崎大学の新入生歓迎スタンプラリーの実施。また「Doまんなかダンス天国」と題したダンスコンテストを開催した。この2つのイベントの主体はいずれも学生であり、Doまんなかモールはサポート役として参加している。「街での楽しい思い出を一緒につくることで街のファンが増え、街に対する想いが次の世代につながる」と甲斐氏は語る。また「Doまんなか大学」も昨年度は商業者27名の受講であったが、20年度は69名の受講申込みがあり、そのうち福祉関係者が17名、大学生が4名参加するなど、コミュニティの輪は広がっている。

【～つながる・ひろがる街づくりへの熱い想い（販促強化へ向けて）～】

このようにイベントを通じて、「情報の共有化」(村岡氏)、「Doまんなかコミュニティの形成」(錦田氏)、「街を愛する次世代の育成」(甲斐氏)と「Doまんなかモール委員会」は進化を続ける。そして、かねてからの命題であった「イベントの集客を

いかに売上につなげるのか」に対する手段として商店街と大型店の共同販促イベントを「Doまんなかモール赤札市」として20年9月に実施した。Doまんなかエリアの商店60店舗と2つの大型店が合同で大出しを行なったこのイベントは、中心市街地に大きなインパクトを与えた。厳しい経済情勢の中、中心市街地の活性化に明確なゴールや答えは存在しない。しかし、街に対する熱い想いがつながる限り、「Doまんなかモール委員会」の挑戦は主役を引き継ぎながら続いている。

【Doまんなかモール委員会】

(宮崎市橋通3丁目周辺のア商店街、5大型店から組織される任意団体)

- ・店舗数：約350店舗
- ・URL：<http://domannaka.jp/>

【平成20年度スローガン】

「つながる　ひろがる　Doまんなかコミュニティ」

【主な事業】

- ・Doまんなかファッションショー
- ・Doまんなかウェディング
- ・Doまんなか大学
- ・一店逸品
- ・まちかどギャラリー
- ・Doまんなかパーキングシステム
- ・Doまんなか赤札市



[村岡前委員長(右)と甲斐販促副部長(左)]

定期朝市「トロントロン軽トラ市」



ここがポイント

軽トラの荷台及び軽ワゴンの室内が店舗に早変わり！軽トラ約100台が一列に並んだ光景は圧巻です！



ビルの屋上から



たくさんの人、人！

きた。しかし輸入自由化・近年の燃料、飼料等の高騰によって厳しい経営状況になっている。この様な状況の中で、平成16年6月に本町より「川南町中小小売商業高度化事業構想」の認定を受け、商工会がTMO(まちづくり機関)として発足した。その後、複合施設建設に着手し平成18年3月に完成。施設は特にコミュニティ施設として活用されている。さらに平成18年9月からは、商店街活性化を目的として、600mの中心市街地を利用した定期朝市「トロントロン軽トラ市」を実施する事となった。

【取り組みの背景】

川南町は宮崎県内のほぼ中央に位置し、背に尾鈴山系を挙し、眼下に唐瀬原・国光原大地を有し、そして太平洋に面した日向灘に県央最大の通浜漁港と、農業・畜産・漁業を基幹産業とする町。戦後軍用地を開拓地として解放したため入植者が全国より集まり一大農業地帯となった。この事により日本3大開拓地の1つとなり別名『川南合衆国』とも言われ、『フロンティアスピリットの町』として知られている。また中心部2kmに商店街が形成されており約100店舗余りが並ぶ、人口約17,200人余りの調和のとれた町である。基幹産業である農業・畜産・漁業は食料基地としての機能を有する県内屈指の町として発展を続けて

【取り組みの概要・経過】

平成18年5月に『(財)宮崎県産業財団平成18年度宮崎県中心市街地商業活性化基金事業助成金』及び町の助成を受け、平成18年9月に中心市街地を歩行者天国とし、道路の片側に1台あたり7mの間隔で軽トラックの荷台又は軽ワゴンの車内に農産物・海産物他を陳列し販売する方法で、毎月第4日曜日の朝8:00~11:15まで朝市を開催する事にした。第1回は各種団体(JA、漁協他団体)等が協力要請に出向き又、近隣商工会にも協力頂き64台の出店者を確保した。第1回目、天候の事、出店者・お客様が来てくれるかなど心配しながらの準備となつたが、販売準

備が終わった軽トラの並ぶ状景を見た時、その壮大さに思わず感激した。第1回目の状況は新聞にカラーで大きく取り上げられ、その後各メディアによって大々的に取り上げて頂く事となった。

【取り組みの効果】

市は回を重ねる毎に出店者・来場者共に増加を続け、現在では出店申込台数限度107台を越す月もある。来場者も推定5~6,000人の朝市へと成長。商店街も出店する店、自店前で商品を販売する店と、これだけの来場者に対し何とか自店に引き込もうとする動きも活発になってきている。平成19年度経済産業省の直轄事業である「全国展開支援事業」において特産品開発に取組んだ。平成20年度においても同じように採択を受け軽トラ市を軸とした観光開発に取組んでいる。遠方からのお客様を少しでも当地・近隣町村にとどめ、経済効果へ結びつけようと「グルメマップ」の作成・町内観光地のバッパー等を実施している。なお、このトロントロン軽トラ市によって県内外から視察研修が相次いでおり、全国の商店街にとって、何らかの活性化策への糸口になればと願っている。

【今後の課題など】

これまで、マスコミ報道等により軽トラ市事業を始めとした本町の宣伝ができた。しかし今後はニュース性も薄れ、今までの様には取り上げて頂けないとと思われるため、どの様に広報するか、お客様をどの様に誘導するか、商店街を軽トラ市とどの様に融合させるかに関し、現在全国展開支援事業の中で取組んでいるが、3年目のこの軽トラ市が本町及び宮崎県の観光資源となり得るかが今後の軽トラ市、地方商店街再生のカギを握っていると思われる。

【トロントロン商店街】

- ・所在地：宮崎県児湯郡川南町大字川南
13680-1
- ・会員数：約400人
- ・店舗数：約100店舗
- ・<川南町商工会URL>：
<http://www.miya-shoko.or.jp/kawaminami/>



<川南町商工会>

小さな街でも量販店に負けない 地域密着型商店街づくりを実践!!

！ここがポイント

「まちの駅 宇宿（うすき）」や「うすきエコステーション」を鹿児島県内で初めて設置。それによる全国商店街連携物産展の開催。市電沿線商店街連携ツアーを催行。「商店街が無くなったらどうなるか」街路灯の消灯を実施等、鹿児島の商店街では初となる企画を次々と実施し、地域密着型商店街として小さいながらも近隣の量販店に対抗しながら効果を上げている。



宇宿商店街振興組合

【取り組みの背景】

同商店街は鹿児島市の交通の拠点である鹿児島中央駅から3駅のJR宇宿駅と鹿児島市電脇田電停を最寄りとし、鹿児島市内の中心地からは南部寄りの駅前商店街であるが、近年近隣地区の幹線道路沿いにイオンをはじめ大型店が次々と出店している。

【取り組みの概要・経過】

宇宿商店街では地域密着型商店街として生き残るために、鹿児島県の商店街では初となる企画を次々と実施している。

「まちの駅 宇宿」

商店街の情報発信基地、人と人との交流拠点として地域住民と会員店舗とを結んでいる。



全国商店街連携物産展の開催

連携する全国各地の商店街のお勧め逸品を展示・即売、大学生と中学生との協働事業として定着している。



うすきエコステーション

空き缶回収に協力すると加盟店の割引券が当たるマシーンを設置。まちの環境美化に加え、地域住民と会員店舗の一体化に効果を上げている。



街路灯消灯実験

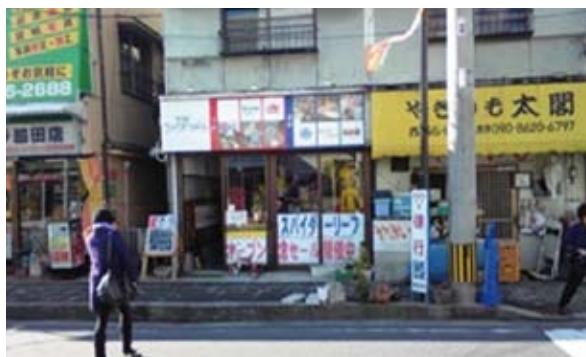
街路灯を一斉消灯し、商店街が無くなれば街の灯が消えることを市民にアピール。

市電沿線商店街連携ツアー

参加応募型で宇宿商店街及び連携する市内の商店街を市電で巡るツアーを実施。各商店街の魅力や頑張っている個店舗を再認識してもらう企画。

宇宿ワールドアパートメント

空き店舗対策として旧民家を改装した店舗に2坪のチャレンジショップを設置。



宇宿十日えびす祭り

毎月十日戎（縁日）を開催

【取り組みの効果】

特色ある企画は来街者の引き留めにつながっており、マスコミにも頻繁に取り上げられ、商店街の宣伝にたいへん効果をあげている。また、大型店の隣接地区で頑張る商店街として市民や行政の評価も高く、県外からの視察も多数訪れ、最寄商店街のリーダー的存在となっている。

ちなみに空き店舗率は、4年間変わらず7.4%を維持。量販店開店(H19.10月)前後の商店街駐車場入庫台数はH19.5月7,450台、H20.5月7,468台と健闘している。

【今後の課題など】

様々な取り組みを地域の活性化と組合員の売上増に効果的に結びつけていくことが、組合活動を円滑に推進していくために必要である。(地域内資金還流を研究中)

また、これらの活動を継承する後継者を発掘し育成していくことが課題である。

【宇宿商店街振興組合】

所在地：鹿児島県鹿児島市

会員数：36名

店舗数：97店舗

商店街の類型：地域型商店街

<http://www.usuki.or.jp/index.html>

【この商店街にこの人あり】



理事長 河井達志

斬新な企画を豊富な人脈とまちの応援団「えびすサポーター」を駆使し、次々と実現していく商店街事業の仕掛け人。

【うちの商店街、ここが自慢】

中心商店街でなくても次々と企画を実現させることで地元の楽しい商店街をアピール。高齢者や交通弱者に優しい商店街。どこにも負けない、団結のある商店街。

商店街交流ひろば コザBOX!!

！ここがポイント

トイレ休憩スペースの整備と拠点づくり、こどもたちとの協働でコミュニティ回復！



【取り組みの背景】

コザ商店街連合会の会員である一番街商店街振興組合は、30年以上前に建設したアーケードの老朽化、経営者の高齢化などが見られ、空き店舗対策も課題となっている。また、商店街のトイレや休憩場所となる施設、まちづくりの拠点整備が求められていた。そうした中、コザ商店街連合会が主体となり、賑わいを創出し、空き店舗を開ける呼び水効果を目的に、沖縄市の「商店街再生チャレンジショップ事業」として「商店街交流ひろばコザBOX」を設置した。

【取り組みの概要・経過】

コザBOXは平成20年7月にオープン、タウンマネージャーとアルバイトスタッフを配置し、常連客となる年配の方々やこどもたちを中心広く利用されるようになっている。2階の「きぼう

館」は、商店街の会議や1時間あたり1,000円で利用できるフリースペースとして貸し出している。ここでは自主企画講座「コザ講座」をはじめ、人気を博す教室を生み出し商店街に賑わいを創出している。この他にもレンタサイクル事業や酢を使ったドリンクバー「酢多Bar」の運営を行うなど、自立経営を目指している。また、スタッフを常駐にしたことにより、地域のこどもたちとのコミュニケーションが活発になり、「一番街ガーディアンエンジェルス」の発足に至った。一番街ガーディアンエンジェルスとは、近隣の小学校低学年のこどもたちが中心となり、商店街内の迷子探しやゴミ拾いを行っているグループである。



【取り組みの効果】

オープンから約6ヶ月で延べ利用者は1万人を超えており、トイレや休憩スペースができたことにより、滞在時間が大幅に増加するなど、まちの賑わい創出に効果がみられた。また、来館者の属

性データを蓄積し、商店主への公開も行っている。さらに、活発に議論を交わすことのできる場所（2階「きぼう館」とタウンマネージャーの存在によって、商店街独自の計画「一番街・サンシティ商店街活性化基本計画」を策定し、市が策定中の中心市街地活性化基本計画と並行する形で商店街が自ら先導してまちづくりに取り組むようになった。

コザBÖXを拠点に行われた大小イベントなどで、賑わいの創出や自主講座により周辺の商店への効果、さらにコミュニケーションの場としての効果もみられるなど、地域連携の中心拠点としての役割を果たしている。



【今後の課題など】

若手の新規参入を促し、活性化するにはどうするか議論を重ねているところである。また、現在はタウンマネージャーに業務を負う部分が多いため、地域全体としてコザBÖXの運営を円滑に行うための組織体制の構築が求められている。さらに、早期に自主運営を行えるようにするためにも、収益事業の確立を目的に、レンタサイクル事業などのコミュニティビジネスを複合させ、自立的な運営を目指すことが望まれる。

【沖縄市一番街商店街振興組合】

所在地：沖縄県沖縄市中央1-1-15

会員数：63名

店舗数：104店舗

商店街の類型：近隣型商店街

【この商店街にこの人あり】

沖縄市役所 商工振興課 胡屋地区担当タウンマネージャー 由利 充翠

商店街交流ひろばコザBÖXにおいて、通りの清掃、トイレの掃除、自主講座の企画、チラシやパンフレットのデザイン、また会議のファシリテーターの役割を果たし、民間主導のまちづくりへ舵取りを行う。「商店街の基盤は顔が見える関係でコミュニケーションがとれること。いつも挨拶と掃除が基本です。」と笑う。現場にいる専門家としてコミュニケーションをとりつつ輪を広げ、商店街を盛り立てている。

【うちの商店街、ここが自慢】

こどもたちが独自の商店街応援グループ「ガーディアンエンジェルス」を結成し、活発に活動している。「こどものまち宣言」を行っている沖縄市は、15歳未満の子供たちの割合が日本一多い。この特徴を活かして地域活動を継続し情報発信していくことで、地域コミュニティの再生を図っている。



食とアートと交流のまちづくり!!

！ここがポイント

食とアートを中心に老若男女が集う地域再生の拠点！



【取り組みの背景】

かつて130名の組合員がいた銀天街商店街振興組合は、現在では37名となり、組織力は低下し、空き店舗も目立っている。こうした中、昨年より「食とアートと交流の街づくり」を目指した事業を実施、当時の状況を取り戻そうと、従来の惣菜を中心とした地域の台所としての機能に加え、若者やアーティストによりユニークな活性化に取り組むなど、独自の地域再生を図りつつある。大型店にはない「まちぐわー」（市場）の雰囲気が再び注目を集めている。

【取り組みの概要・経過】

平成19年度において、地域交流の拠点となる「銀天大学」をオープンした（沖縄市商店街再生チャレンジショップ事業として実施）。さらに平成20年度は、「食とアートと交流の街づくり事業」を実

施しているところである。具体的には、空き店舗を活用し、新たに屋台村を新設したほか（3店舗）、銀天大学を拠点として、寺子屋講座などによる子どもとお年寄りの居場所づくりにも取り組んでいるところである。美術、三線、囲碁など、ユニークな講師による多彩な講座を実施している。また、11月には全国アートNPOフォーラムを開催したほか、インドネシアから招聘したアーティストが1か月滞在し、創作活動の拠点として作品を発表した。さらに、東京理科大学建築学科の学生20名が長期滞在し、商店街の活性化について提言を行ったほか、アーケード撤去後の活性化策について具体的な提案が行われた。

また、毎月第三土曜日は「銀天街まつり」を開催し賑わいの創出を図っている。インド料理やヤギ汁、串焼きなど、屋台が立ち並ぶほか、地域の子どもたちのダンスや民謡、カラオケなど、地域住民を中心とした商店街応援団による手づくりのステージが繰り広げられるなど、地域密着のイベントとして定着している。



【取り組みの効果】

天ぷら、惣菜など、中食を中心とした地域の台所として次第に来街者も増えつつある。また、アートによるまちづくりが全国でも注目され、県内外の大学生やアーティストなどが長期滞在する機会も増えている。

また、こどもたちの居場所づくりとして、平日の夕方は寺子屋に集まるこどもたちで賑わい、また学校帰りの高校生もたこ焼きや天ぷらなどを求めて立ち寄るようになっている。夜は歌声ライブなどを実施することにより、毎月の「銀天街まつり」のほか、大小イベントの実施により次第に近隣のみならず、市外からも来街者が増えつつある。



【今後の課題など】

アーケードの一部撤去を控えているため、今後のアーケードリニューアル後の商店街をどうすべきかなど、組合としての将来ビジョンを描く必要がある。実際の組合は会員数が減るなど弱体化が著しく、また高齢化が進んでいるため、若手の新規参入者も促進する必要がある。銀天街としては、こどもからお年寄りまで、近隣住民を対象に、食品、衣料、雑貨などを提供する「安くて 買いよい みんなの街」というコンセプトを打ち出しているが、地域密着商店街、あるいは生活街として、改めて課題を整理する必要がある。

【沖縄市銀天街商店街振興組合】

所在地：沖縄県沖縄市

会員数：37名

店舗数：58店舗

商店街の類型：近隣型商店街

【この商店街にこの人あり】

「そうざいの店 三幸 城間幸隆さん」

銀天街の惣菜通りにあるそうざいの店「三幸」の城間幸隆さんは、銀天街が打ち出す「食とアートと交流」を一人で体現している。ふらりと銀天街に散策にきたお客様を見かけると、エネルギーッシュで高らかな笑い声とともにゆんたく（おしゃべり）をはじめ、沖縄の旧暦文化の話などで楽しませてくれる。お店の空き時間には城間さんの三線の音色が響く。こどもたちにエイサーを教えたり、惣菜を一緒に作ったりと、こどもの居場所づくりにも貢献している。店舗のほか、組合の専務理事としても、その活躍は幅広い。

【うちの商店街、ここが自慢】

レトロな風合いがコザのまちに溶け込み、商店街独特の風景を醸し出している。天ぷらや惣菜など、老舗店舗を中心に屋台村も立ち並ぶ。銀天街の取り組みをブログで見たという北京の方（日本人の夫と中国人の妻）とのメールでのやり取りから、実際にユニークなアジアンエスニック料理店がオープンし人気を博している。老若男女、国籍など、あらゆる制限を超え、誰でも受け入れる商店街、生活街として、再びその活動に注目が集まっている。